

要 旨

Pursuing “Dynamic-Equivalent Translation” : An Analysis of Three Translations of *The Great Gatsby*

菅沼 幸子

第1章

この章では、この論文の目的を述べ、昨今の翻訳を取り巻く状況、更に小説 *The Great Gatsby* (1925) とその時代背景などを概観する。

昨今のグローバル化によって読者は多くの情報や知識を得られるようになったとはいえ、やはり文化や言語の違いは大きい。小説は文化的、言語的観念などを作者と読者が共有していることを前提として書かれているため、原文と翻訳の所属するところの文化などの違いをどのように克服するか、更に、原作の読者が得たものに近い印象や感動をどのように訳出するかが文学翻訳に求められる課題である。Eugene Nida (1914-2011) が指摘している“Dynamic-Equivalence”が何らかの手がかりを与えてくれるかもしれない。

原文テキストとして F. Scott Fitzgerald による *The Great Gatsby* を、翻訳テキストとして、野崎孝、村上春樹、小川高義の三作品を選んだ。この三者の翻訳分析を通じて、実際のなよりよい翻訳の手法を探ってみたい。

第2章

ここでは、主に以下の三点に重点を置いて翻訳分析を行っている。この三点とは、(1) 文体、(2) “old sport” (3) 比喩的表現、である。文体についてのセクションでは、これを更に訳注、一人称代名詞の選択、カタカナ表記による借用語（以後カタカナ語という）の使用の三つに分け分析を試みている。カタカナ語については、読者の意見を知るため、「オールド・スポーツ」を例にとりて質問票を作成し、これに115名より回答を得て集計をしたところ、70.4% がなんらかの日本語翻訳を望んだ。

また、原文の *The Great Gatsby* の文体の特徴の一つは生き生きとして効果的な比喩的表現を多用していることであるが、比喩とはまさに知識や文化的土壌を共有して

いる者にもみ通じるもので、これを文化的土壌の異なる日本語にどのように訳すかということは、翻訳読者が原作読者に近い感動を得ようとする時に重要な要素となる。

上記の分析を通して得たものは、決まったルールのようなものではなく、それぞれの文節ごとにその持つ意味合いに応じた訳が必要であるというものである。だからこそ、その小説全体のテーマを考え、文化や言語的な差異を埋めつつ原作の持つそれぞれの文章の雰囲気を壊さないように訳することが重要である。

第3章

ここでは、自分自身による翻訳の試みに生かそうとして、第2章でおこなった分析の結果から得たものを取りまとめている。

第4章

第3章、第4章の結果をベースに行った自身の試訳について述べている。

第5章

以上を取りまとめた章である。